

第2章 研修講座による探究型学習推進の支援

本章では、今年度より県内全面実施となった探究型学習の推進に向けて、県教育センターが実施した探究型学習推進講座Ⅰについて報告する。

探究型学習推進講座Ⅰは、本県が推進する探究型学習についての基礎（趣旨や背景）を理解するとともに、どのような点に留意して授業づくりを進めていけばよいかを考え、児童生徒一人一人の学びを大切にしたい実践的指導力の向上を図ることをねらいとして、前期は、小学校、後期は、中学校、高等学校を対象として行った。

1 探究型学習推進講座Ⅰ【前期】について

(1) 講座の概要

前期の講座は、平成28年7月13日に県教育センターにおいて、山形大学地域教育文化学部 野口 徹准教授と兵庫県たつの市立新宮小学校 石堂 裕教諭を講師に迎え、小学校・特別支援学校（小学部）の教員を受講対象として実施した。参加者は、37名であった。

講座の構成を以下に示す。

- ① 「探究型学習」の基礎となる考え方について（講義 45分）
- ② 「探究型学習」の授業実践例（講義 90分）
- ③ 「探究型学習」の授業づくりについて（ワークショップ 150分）

① 「探究型学習」の基礎となる考え方について

山形大学地域教育文化学部 野口 徹准教授が、次期学習指導要領に向けて検討されていることと、山形県が取り組んでいる探究型学習の考え方や方向性がどのように関連しているかについて解説した。

② 「探究型学習」の授業実践例

石堂教諭が、「授業を変える！子供が変わる！～探究する力を高める授業づくりのポイントとは～」と題して、これまで行ってきた授業実践を発表した。

ア 理論的な部分の説明

探究型学習を行うために押さえておきたい理論的な部分を次のように説明した。

- 学びの5階層を意識すること。5階層とは、学習習慣・学習規律を母体として構築される、「向かうーわかるーできるー用いるー深める」という思考レベルのこと。
- 授業の構想の際に、幼児教育から高等学校教育までのつながりを意識すること。
- 「子供の実態」、「子供が生活する社会の環境」、「子供たちの未来に必要なこと」の三つを知り、ベースとすること。
- 単元のデザインとして、教科の学びと総合的な学習の時間の学びとの連動をはかること。
- 児童に深い思考をさせること。
- 学習活動を想定して「思考スキル」を用い「思考のプロセス」を働かせること。
- 確かな学びのために、学習課題の工夫、繰り返しの機会をつくり、体験活動を行うこと。

イ 授業を実際に行う際に意識していること

石堂教諭が授業を実際に行う際に意識していることは次のとおりであった。

(ア) 学習環境の検証

学習習慣、学習規律を作るための学習環境の一例には、教室掲示のルールや教室

内の物品の配置、前時の確認用のホワイトボードの活用がある。学習プロセスの共通化も重要であり、どの授業も共通に展開することができる学習サイクルを示した。

(4) 学習单元をつくるポイント

第3学年の総合的な学習の時間に、「しんぐう自ぜん研究所 ひみつをさがそう 伝えよう」という单元をつくり、児童の気づきを拾いながら、理科、社会等の教科と結びつけ、どのように地域とつなげて单元を構成したか、似た昆虫や植物を比較して整理する際に、思考スキルを用いてどのように高次の学びに向かわせたかを説明した。

同様に環境教育を一つの柱とした第4学年の事例を挙げた。学校近くにある遺跡を説明する市のパンフレットには水田が載っているのに、今現在、その場所に水田がないことに児童が気付いた。このことをきっかけとして、水田づくりから始めた米の学習を中心に、米が育つ環境に目を向け、環境学習まで広げていった総合的な学習の時間の例を説明した。第6学年の事例では、環境学習の総まとめとして、ゴミ捨て場として立ち入り禁止となっていた卒業記念の庭園を、環境学習用の庭園とビオトープとして再生させた例などを紹介した。

また、第5学年の例として異文化理解を柱とし、外国から日本語が話せない転入生が来たことをきっかけにして多文化共生をテーマにした单元を構成し、専門家やゲストティーチャーを活用して外国文化の理解や外国人との共生を单元とした実践例を紹介した。

石堂教諭によれば、いずれの場合においても、児童の発表会を行うことや振り返りによって児童が身に付けた資質・能力を児童自身が文章化して確認することが重要であるとされた。石堂教諭の説明の中には、单元を構成する際に大切にしたいポイントもあった。次は、説明で用いられた資料である。

背景を変える！子どもが変わる！
～教育する側の環境を変えるポイントとこ～

子どもは環境に敏感に反応します。

兵庫県たつの市立教育センター 吉田 彰

知識・技能を身に付ける育成すべき環境・機会作りが重要

「**学びの場**」を創る

どのような場か
(アクティブラーニングによる積極的な)
学習環境の創り
学習環境の「**コミュニティ**」でサポート

得意なことがある子ども
得意なことを活かす
(得意なことを活かす)

苦手なことがある子ども
苦手なことを克服する
(得意なことを活かす)

学びの6階層

実用
活用
習得
理解
理解
学習意欲・学習活動

子どもたちの食育・習力について
幼稚園教育から高等学校までのつながりを
意識して行くことが大切

幼稚園教育
小学校教育
高等学校教育

「子どもと創る探究型授業」3つのベース

「子どもの実態」を知る
★学習意欲、習得レベルの異なる子ども、習得状況

「子どもが生活する社会の課題」を知る
★地域の課題や問題を解決

「子どもたちの未来に必要なこと」を知る
★知識・技能、態度・能力

兵庫県たつの市立教育センター
吉田 彰

単元のデザイン(誰かを学ぶに向けて)

誰かから学ぶ
誰かへ学ぶ
ベースとなる深い理解

「深い理解」をさせること
～体系的な学習が必要！

知識
深い理解
感覚エピソード→誰かとの関わりで深まる。繰り返しにより定着される。体系的に定着される。

兵庫県たつの市立教育センター 吉田 彰

感性的思考とは？

最先エピソードからの生活を意識する深い思考

「**知識**」を学ぶ

深い思考→習得レベルの進捗に差をなく

感性的思考→「**自分**」を大切にしている
「**自分**」を大切にしている
探究する力につながるポイント

学習意欲を高め、定着した思考スキルとプロセス

思考スキル	説明
問題設定	問題設定(課題設定)
仮説	仮説を立てて検証する
検証	検証(仮説検証)を行う
結論	結論(仮説検証の結果)
応用	結論を応用する
評価	結論を評価する
発表	結論を発表する
振り返り	振り返り(振り返り)
まとめ	まとめ(振り返り)

まずは、**比較、分類**から

思考スキルを高めるには、**自分**を大切にしていることが大切である。自分と他者を比較し、分類することで、自分の考えを整理し、表現することができる。

教育現場で「誰かへ学ぶ」をつくるために

学習意欲(エピソード)
学習環境
学習意欲のエピソード
誰かへ学ぶ

誰かへ学ぶには

自分の考えを整理し、表現する
誰かへ学ぶ
自分の考えを整理し、表現する

探究的な学び(探究)・社会性(探究)が必要！
社会性(探究)→探究活動、探究活動への参加(探究)・探究活動の推進(探究)

生活・社会で「誰かへ学ぶ」をつくるために

生活・社会での探究(探究スキルの活用)
探究スキルを高める
誰かへ学ぶ

「学習環境」の検証

2年生教室の様子

他教科や総合と関連できる資料学習でのポイントを掲示

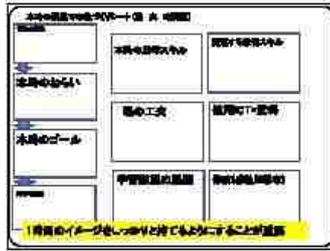
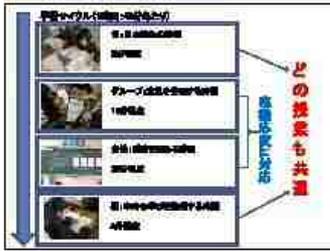
3年生教室の様子

学習のやりかたは質問紙に

教室に学習スキルに合わせた学習ツールを置く

移動用のホワイトボードには質問紙での記録を！

授業の1時間(45分)あたりの学習サイクル
→グループ全体へ



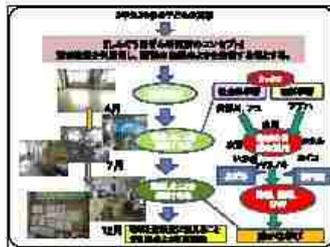
発達段階と関らし合わせた
学習段階づくりの学習環境の基準

発達段階	学習環境	学習活動
低学年	児童の興味・関心を喚起する環境づくり	児童の興味・関心を喚起する。児童の興味・関心を喚起する。
中・高学年	児童の興味・関心を喚起する環境づくり	児童の興味・関心を喚起する。児童の興味・関心を喚起する。

「直接体験」の効果と「気づき」の検証

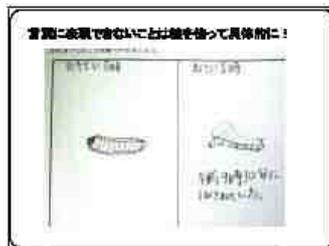
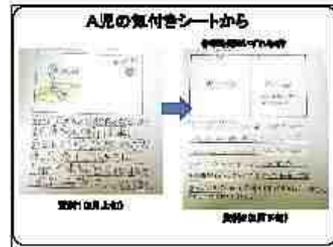
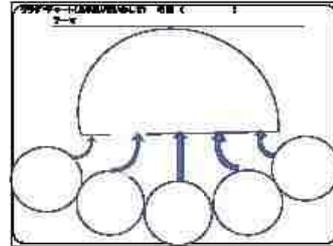
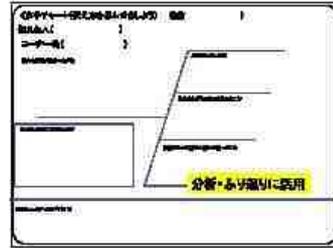


- 学習單元を創るうえでのポイント
- 児童等との関わりをどうするか
→ 児童等（児童等）を主（主）を中心に
 - 児童等の学習が何をめざすのか
（そのための環境をどうするか）
→ 児童等（児童等）、児童等（児童等）、児童等（児童等）
 - 学習環境づくりはどのようにするか
（行動、環境づくり、児童等）
→ 児童等（児童等）、児童等（児童等）、児童等（児童等）



体験をより効果的にするための思考スキル
「比較する」





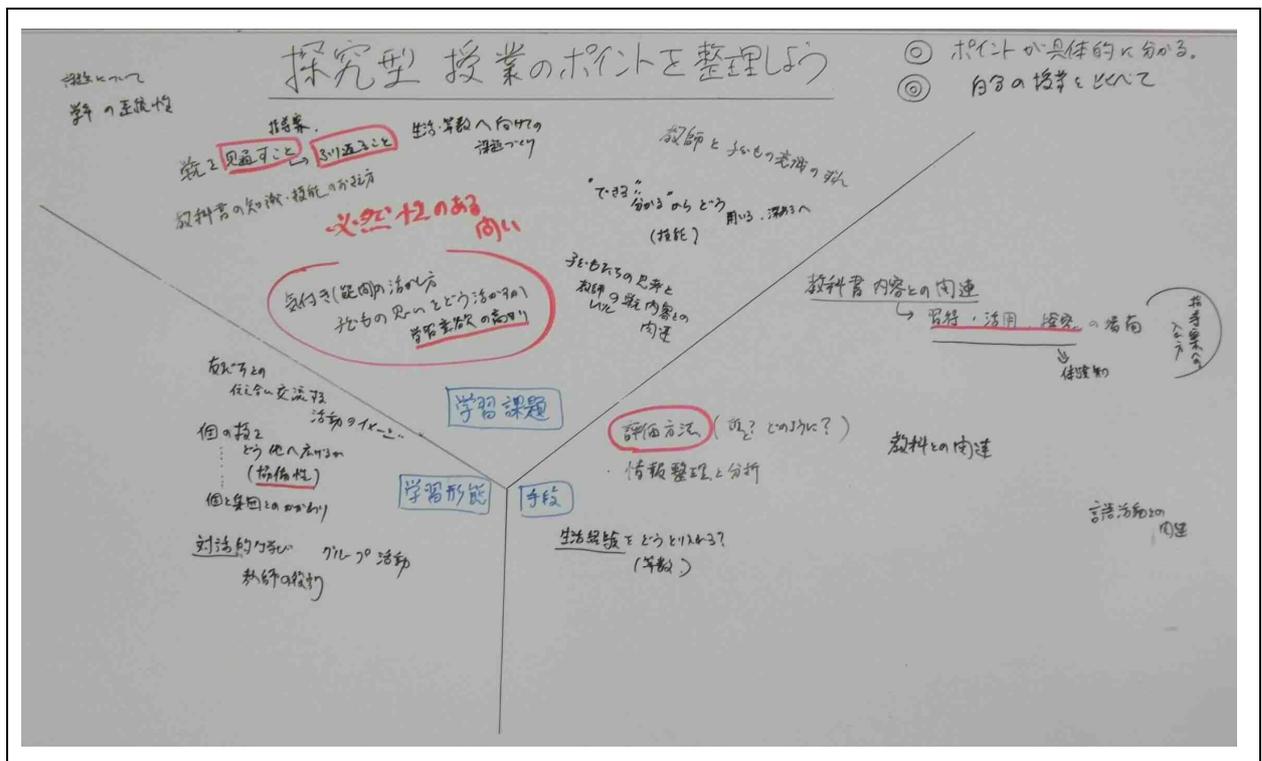
③ 「探究型学習」の授業づくりについて

ワークショップは、次のように進められた。受講者の受けもつ学年をもとに3～4名のグループに分けられた。グループごとに、受講者が実践した授業事例を、持ち寄った資料を用いて説明した。次に、発表された授業実践の事例の中から、探究型学習の授業として最もよいと思うものを一つ選び、さらによくするためにどうしたらよいかを話し合った。その話し合いの中で、探究的な学習の授業を展開する上での疑問点や課題を挙げ、グループで話し合ったことを受講者全体に向けて発表した。全てのグループから疑問点が出されたところで、石堂教諭が受講者から出された疑問点について、回答と補足のための講義を行い、野口准教授が全体のまとめを行った。

次は、受講者から出された疑問点や課題の一部である。

- ・ 算数・国語などの教科では、基本から出発する課題づくりが難しい。学びの順番を組み換えるのが難しい。
- ・ 国語の物語文において学習課題を考える際に、私たちが意図することと子供たちが発言したことをどのように繋げて、子供たちに必要感のある課題にするか。
- ・ 見とらなければいけない評価のやり方について。
- ・ 膨らんでいきそうな時数配分について。
- ・ 総合的な学習の時間で次の課題につなげるため情報を整理する際に、教員が思いも寄らなかった子供の思いに対して、どう折り合いをつけながら整理するのか。
- ・ 小学校1年の国語で、友達と交流したあとの振り返りをどうするか。
- ・ 運動が苦手な子にどうすると課題意識をもたせることができるのか。
- ・ 生活科において、学ぼうちに子供の興味の方角性が変わっていったときにどう対処すればよいか。
- ・ 算数などで、生活と結びついた課題をどうつくればよいか。
- ・ 体育の授業のときに個人でハードル走を探究する児童がいた。協働的に探究していない場面での指導の仕方についてどのようにするか。
- ・ 算数で探究するとき、生活と繋げてつくっていく授業が難しく、毎時間はできない。「どうして」「解きたい」「考えたい」という、探究したい気持ちをどう児童にもたせるか。
- ・ どんなことに気を付ければ、必要感のある課題を提示することができるか。
- ・ 目安の時数の中で、探究がつかれない。
- ・ 他教科との関わり。
- ・ グループ活動の際に、話し合わせ方、仕組みせ方をどうすればよいか。
- ・ 主体的に学ぶため課題設定は、どのようにするとよいか。
- ・ 評価の在り方、どのような振り返りをさせるとよいか。
- ・ 学びの質を深め、次に繋げる対話のもち方と、その際の教師の出はいつがよいか。
- ・ 単元を通じてつけたい力と言語活動等を繋げていくときに、考えることは何か。

石堂教諭は、グループから出される疑問点を聞き取りながら、ホワイトボードにYチャートを用いて整理した。次は、そのときに作成したYチャートである。



作成後、石堂教諭は、授業づくりにおける授業を構成させる一つの枠は、学習課題、学習形態、効果的な手段の三つであることであるという認識をしていたことからYチャートを選択し、課題や疑問点について整理していった。説明では、授業でYチャートを使用することを想定しながら、Yチャートを導入して授業を展開していく際のやり方を説明した。次は、その手順である。

- ア 課題を明確にする。(課題の中に「考える」といった語句を入れると、児童の思考が曖昧になるので避ける。)
- イ 児童に課題について語らせたときに、多く発言のある部分が、その集団が今必要と感じていることとなる。分類して書いていくと、児童の興味・関心が高いところがわかる。そこに焦点化していくように児童と単元の課題を考えていくと児童から発した課題設定となりやすい。
- ウ 児童と一緒に設定した課題に対して、教員が評価項目を示し、評価規準のB判定となる達成すべき内容を児童に示す。
- エ 評価規準のA判定となる内容は、児童がどんなことができるようになっていることかを児童に語らせる。
(語らせないとその後の学習意欲につながらないため、大切な部分である。)
- オ 語った言葉をもとに、ルーブリックを作成していく。その際、前の時間の振り返りが、次の学習課題になるように仕組んでおくと、前時と本時のつながりがよくなる。

Yチャートの分析から、今回の参加の受講者の課題意識は、学習課題に関することであることが焦点化された。その後、学習課題づくりに関して重点的に説明し、評価、協働性、教科書内容との関連、技能教科における探究、習得－活用－探究のプロセスなど、受講者が出した疑問点に関しての考え方や事例について、説明、紹介を行った。

(2) 講座における振り返りシートから

講座の最後に講座の振り返りを行った。振り返りシートにはA面とB面があり、A面は講座終了時に記入し、B面は復命（還元）状況を書くものである。以下は、A面の記入項目である。

1 本研修講座を評価してください。

(1) 具体的評価

- ① 講座内容について
- ② 講座運営について

(2) 全体評価（(1)の評価をふまえ、本研修講座に対して、当てはまる記号一つに○印を付けてください。）

A 大変よい	B よい	C あまりよくない	D よくない
--------	------	-----------	--------

2 研修を振り返ってください。

<受講前の課題>

<研修の成果と課題、自己の変容等>

3 研修成果の還元（復命）の見通しを立ててください。

- ① 実現の時期
- ② 具体的内容
- ③ 対象、方法等

次は、具体的評価のうち、講座の内容について受講者が記述した主なものと、全体評価についてまとめたものである。

具体的評価のうち、講座の内容について（抜粋。記述は受講者が記述したまま。）

- ・ 午前中のどちらの講座も大変ためになった。午前中の講座の二つ目は総合的な学習の時間の実践だったので、午後からの教科中心の講座もよかった。
- ・ 考え方→実践例でわかりやすかった。後半、先生方が同じような悩み（課題）を持っていることがわかってよかった。
- ・ 探究型学習と中教審、学習指導要領との関連がわかり、基本ラインが見える内容でよかった。特別な方法があるものではなく従来の考え方に少しプラスできそうだった。
- ・ 野口先生からの理論面でのお話と、石堂先生からの実践のお話を一緒にうかがえて、“深い学び”についてよく考えることにつながりました。
- ・ 「探究型学習の基礎」から実践まで充実した内容で、探究型学習とは何か自分の中で明確なものをつかむことができました。
- ・ 生活科・総合を中心とした学習がまさしく探究型の学びであることがよくわかった。子供たちの気付きや疑問を大切に拾いながら進める重要さに気付くことができた。
- ・ 学習指導要領の改訂をふまえて、探究型学習についての基本的な考え方を理解できてよかった。また、実践例から、今後の学習に対する教材・評価について、少し意識を変えることができてよかった。
- ・ 探究型学習をどこまで成果としてあげていきたいのかまで明確な思いを知りたかったです。最後の最後で、学校の中で共有化していくことが大切であることがわかりました。
- ・ 総合的な学習の時間の実践について、大変刺激を受けた。できればもっと教科の視点に立った探究型の話も聞きたかった。
- ・ 探究型学習と学習指導要領との関連、または、これからの子供たちにつけなければならない力などについて、具体的に示していただき、大変勉強になった。子供の

気づき・表現などの事例も大変わかりやすかった。

- ・ 指導要領改訂の基本的な考え、これから求められる資質・能力をはじめ、体験活動一学ぶ場、気付く能力をはぐくむことの大切さを、各教科、低学年から中高学年のつながりの上で大切であることを学ぶことができた。

表 2-1 は、講座の全体評価をまとめたものである。

表 2-1 探究型学習推進講座 I 【前期】の受講者による全体評価

全体評価	人数 (%)
A 大変よい	17 人 (45.9%)
B よい	15 人 (40.5%)
C あまりよくない	1 人 (2.7%)
D よくない	0 人 (0.0%)
未記入	4 人 (10.8%)

表 2-2 は、研修前の課題について受講者が記述した内容を類型化して集計したもの（複数回答あり）であり、表 2-3 は、研修の成果と課題、自己の変容等について受講者が記述した内容を類型化して集計したもの（複数回答あり）である。

表 2-2 研修前の受講生の課題を類型化したもの

研修前の課題	人数 (%)
探究型学習における授業展開の仕方	15 人 (40.5%)
探究型学習についての基本的な理解	13 人 (35.1%)
探究型学習における課題設定について	7 人 (18.9%)
アクティブ・ラーニングについて	7 人 (18.9%)
単元構成について	5 人 (13.5%)
探究型学習と校内研究との関連	4 人 (10.8%)
探究型学習での評価	2 人 (5.4%)
児童の変容の見方	2 人 (5.4%)
探究型の教材	1 人 (2.7%)
その他	1 人 (2.7%)

表 2-3 研修の成果と課題、自己の変容等を類型化したもの

研修の成果と課題、自己の変容等	人数 (%)
探究型学習についての基本的な理解	16 人 (43.2%)
探究型学習における課題設定について	11 人 (29.7%)
これからやることの方角性や取りかかり方が見えた	8 人 (21.6%)
児童の気づきを大切にすること	7 人 (18.9%)
単元構成について	4 人 (10.8%)
探究型学習における授業展開について	4 人 (10.8%)
教科の連関性	3 人 (8.1%)
児童の見とりの重要性	3 人 (8.1%)
教科のアドバイスが良かった	1 人 (2.7%)
思考スキルの使い方	1 人 (2.7%)

受講者の記載した内容は、児童の思考に寄り添うことや、児童の気付きに関するものが多く、学校現場では、課題設定の場面や単元の導入において課題を感じている教員が多いことが想像される。

2 探究型学習推進講座Ⅰ【後期】について

(1) 講座の概要

後期の講座は、平成 28 年 7 月 20 日に県教育センターにおいて、山形大学地域教育文化学部 野口 徹准教授と静岡県教育委員会高校教育課 眺野大輔管理主事を講師に迎え、中学校、特別支援学校（中等部、高等部）、高等学校の教員を受講対象として実施した。参加者は、39 名であり、校種別の内訳が中学校 14 名、特別支援学校 1 名、高等学校 24 名であった。

講座の構成を以下に示す。

- ① 「探究型学習」の基礎となる考え方について（講義 45 分）
- ② 「探究型学習」の実践例（講義 90 分）
- ③ 「探究型学習」の組織づくりについて（ワークショップ 150 分）

① 「探究型学習」の基礎となる考え方について

野口准教授が、次期学習指導要領に向けて検討されていることから、中学校、高等学校における探究的な学びに関する部分を重点的に解説しながら、探究的な学びのプロセスについて説明した。また、県内での探究型学習推進校の探究的に学ぶ児童の様子や他県での探究的な学習を行っている学校の取組みも紹介した。

② 「探究型学習」の実践例について

眺野管理主事が、『『探究型学習』で生徒の主体的に学ぶ力を高める』と題して、富士市立高校で行った、地域連携・キャリア教育・探究学習を柱とした授業実践やカリキュラム開発を説明した。

○ 総合的な学習の時間の目標とカリキュラム・マネジメントについて

目指す学校目標と育てたい生徒像から、総合的な学習の時間における目標を設定した。

- (1) 体験的な活動を適切に位置付けた探究的な活動を通して、自ら問題に気付き、主体的に課題解決に取り組むことで、思考力、判断力、表現力等を身に付ける。
- (2) 協働的な課題解決の活動を通して、多様な意見や考え方を尊重し、互いを認め合いながら行動する力を身に付け、地域や社会に貢献しようとする意欲を高める。

この目標を達成するため、半期ごとに単元を設定し、それぞれに探究のサイクルを繰り返す授業を構想し、3 年間のカリキュラムを作成した。

1 年生前期：ブレインストーミング、KJ 法など、課題を見つけ、情報を集め、まとめて表現するための基本的な方法を学ぶ。

1 年生後期：ディベートにチームで取り組むことで、多角的な見方や論理的な考え方を学び、コミュニケーション力や協働力を高める。

2 年生前期：富士市の抱える課題に向き合い、解決策を検討し、プレゼンテーションすることで、地域の一員としての意識を高める。

2 年生後期：これまでに身に付けた力を活用して、自分自身で設定したテーマで探究することで、社会問題や自分の将来について視野を広げる。

3年生前期：ここまでの学習を振り返り、気づきや自らの成長を自覚し、将来とのつながりを意識したスピーチの作成を通して、進路意識を高める。

特に、「市役所プラン」での「協働的な場面の構成」、「体験活動の重視」、「言語活動の重視」、「教科で身に付けた力の活用」、「振り返りの仕方」は、カリキュラムを作成する上で大切にしたところである。

また、地域の課題解決を題材とした単元をデザインする際、地域との連携、各教科との連携、学校内の組織化、振り返りの際の評価項目の設定をカリキュラム・マネジメントによってどう行ったか解説した。

次は、そのときの配付資料である。

The image displays a collection of nine educational materials arranged in a 3x3 grid. The top row includes a brochure about 'Inquiry Learning' (探究型学習) and a poster for 'Inquiry Time' (探究タイム) with two main objectives. The middle row features a poster for the 'Problem Solving Program' (課題解決型プログラム) and a detailed flowchart of the 'Inquiry Time' process. The bottom row contains three posters for the first, second, and third units of the course, each detailing activities and learning goals.



③ 「探究型学習」の組織づくりについて

ワークショップは、次のように進められた。所属校と指導している教科をもとに受講者が3～4名のグループに分けられた。グループごとに、探究的な学習の自校での取り組みを紹介し、グループ内の学校が現在抱えている問題と課題をまとめた。次に、グループ内で話し合ったことを全体に向け発表し、探究的な学習における共通する問題と課題を共有化した。野口准教授と眺野管理主事が共通する問題と課題のうち解決のヒントになりそうな事例を紹介した。このとき、全体から出た課題や疑問は次のようなものであった。

- ・ 周囲の先生への理解を得ながらの進め方について
- ・ 時数の確保
 - ア 同僚の方と話し合ったり準備したりする時間
 - イ 授業時間
- ・ 課題意識の持たせ方について（探究したい気持ちが生徒にあるのか。生徒へどうやって課題意識を呼び込むのか。）
- ・ 組織づくり
- ・ 研修の持ち方（主担当が悩んでいる。教科学年に任されている。）
- ・ ハードの整備について

(2) 講座における振り返りシートから

講座の最後に講座の振り返りとして、【前期】で用いた振り返りシートと同じ内容の項目で振り返りシートのA面の記入を行った。

次は、具体的評価のうち、講座の内容について受講者が記述した主なものと、全体評価についてまとめたものである

具体的評価のうち、講座の内容について（抜粋。記述は原文のままである。）

- ・ 探究型学習の実践例と、評価（3年間）を知ることができよかった。結果が出る
ことがわかり自信を持って取り組みたい。
- ・ 大変参考になりました。自分が求めていたものに対する明確な答えは得られな
かったが、そもそも明確な答えなどなく、我々教員の日々のアイデア、気付き、工夫
なのだと思います。
- ・ 探究型学習の考え方や具体的な実践例を交えた講話を伺い、これまで何となくや
っていた授業や活動の中にも探究的に行っている内容もあったのだと気付いた。
- ・ 大変中身が濃く、充実していました。ほとんど探究型学習についての知識がな
く、必要を感じて参加させていただいたので大変刺激を受けました。
- ・ 次期学習指導要領の方向性、具体的な探究学習の先進的な実践、そして実際に自
らがそれを進めていくための示唆に富むお話をたくさん伺い、今後の実践に役立つ
内容でした。
- ・ 富士市立高校における具体的な実践例を詳細まで聞くことができ、大変参考にな
った。また他校の先生方も同じような悩みを持つと知った一方で、眺野先生による
回答もあり、有意義であった。
- ・ 問題について共有することができた。学校全体で動きやすくするために、全体コ
ーディネートをする組織づくりが必要だと感じました。
- ・ 「総合的な学習の時間」に偏った講話だったのが残念。教科として探究型学習を
どのように推進していけばよいかを知りたかった。
- ・ 実践例を交えて、大変わかりやすい講座でした。“探究型”という大枠での内容
だったので、教科における学習のあり方についてももう少し具体的に知りたいと思
いました。
- ・ 探究型学習について、基本的な概要や総合的な学習の時間の詳しい実践例を多く
紹介していただき、これから取り組んでいくために十分に役立つものとなった。
- ・ 実践（高校）が多い→基礎的な知識の講義がもう少しあってもよかった。
- ・ グループ活動は他校の先生方と良い交流ができた。
- ・ 基礎についての学びというよりは実践を通してどんな課題があるか、が中心であ
った。内容は大変レベルの高いものであるが受講者が求めていた内容であったかど
うかは疑問であった。

表2-4は、講座の全体評価をまとめたものである。表2-5は、研修前の課題
について受講者が記述した内容を類型化して集計したもの（複数回答あり）であり、
表2-6は、研修の成果と課題、自己の変容等について受講者が記述した内容を類型
化して集計したもの（複数回答あり）である。

表2-4 探究型学習推進講座I【後期】の受講者による全体評価

全体評価	人数 (%)
A 大変よい	20人 (51.3%)
B よい	19人 (48.7%)
C あまりよくない	0人 (0.0%)
D よくない	0人 (0.0%)
未記入	0人 (0.0%)

表 2-5 研修前の受講生の課題を類型化したもの

研修前の課題	人数 (%)
探究型学習についての基本的な理解	15 人 (38.5%)
探究型学習における授業展開の仕方	11 人 (28.2%)
校内体制	7 人 (17.9%)
カリキュラムについて	7 人 (17.9%)
アクティブ・ラーニングについて	3 人 (7.7%)
単元構成について	3 人 (7.7%)
探究型の教材	3 人 (7.7%)
探究科、探究コースの準備について	3 人 (7.7%)
探究型学習における課題設定について	3 人 (7.7%)
探究型学習と校内研究との関連	3 人 (7.7%)
生徒の変容の見方	1 人 (2.6%)
その他	3 人 (7.7%)

表 2-6 研修の成果と課題、自己の変容等を類型化したもの

研修の成果と課題、自己の変容等	人数 (%)
探究型学習についての基本的な理解	18 人 (46.2%)
これからやることの方向性や取りかかり方が見えた	11 人 (28.2%)
単元構成について	4 人 (10.3%)
カリキュラムについて	4 人 (10.3%)
探究型学習における授業展開について	3 人 (7.7%)
探究型学習における課題設定について	1 人 (2.6%)
生徒の気づきを大切にすること	1 人 (2.6%)
教科の連関性	1 人 (2.6%)
その他	2 人 (5.1%)

3 講座の成果

(1) ニーズについて

表 2-2、表 2-5 から受講者が講座を受講するにあたってどんな課題をもっているかがわかった。前期と後期の受講者の多くは、探究型学習の基本的な理解と授業展開の仕方を身につけたいと思って受講している。また、講座の内容に沿っていることからかもしれないが、小学校対象の前期では、課題設定やアクティブ・ラーニングについての疑問や課題を持っている。中学校、特別支援学校、高等学校対象の後期では、探究型学習における校内体制・組織やカリキュラムといった枠組みに対して課題や疑問が多い傾向にあった。

(2) 研修の成果と課題、自己変容等について

表 2-3、表 2-4 より受講者の学びの成果として、多くの教員が探究型学習の基本的な理解が深まったと回答している。受講前から、探究型学習の基本的な理解を目的として受講している教員が多かったことから、受講者のニーズに沿って講座が運営されていたことがわかる。また、講師による実践例の紹介や探究型学習の基本的な考え方がわかったことで、探究型学習を進めていくための示唆が得られ、他校の先生との情報交換を通して、先進的な事例だけでなく県内の学校における探究型学習の事例を知ることができた。

受講者が提出した振り返りシートB面から、受講者の帰校後の還元の仕方は三つに大別できた。

ア 講義資料をもとに、研修内容を所属校の教員へ伝達

職員会議や各教科の会議、ミニ講義等で講義やワークショップでの話し合いとワークショップ後の補足説明をまとめ、研修の概要を発表した。

イ 研修を活かしての授業実践

公開授業研究会や校内授業研究会の授業者として授業を行った。他にも探究のプロセスを意識した単元を構成したり、思考ツールや振り返りチェックシートを用いて探究型学習の授業を改善したりしたという受講者もいた。

ウ 学習指導案づくりや学習会の指導者

探究型学習の学習指導案をつくるための事前研究会や若手を中心にした授業づくり学習会での指導者として探究型学習の授業づくりに関わった。

どの還元の仕方においても、研修を振り返って内容を整理してまとめることで、探究型学習をより理解し授業を行うためのポイントが明確になることで、受講者自身の探究型学習への理解が進んだのではないかと考える。

提出された振り返りシートのほぼすべてに、所属校の教員へ研修概要が伝達されたことの記述があった。このことにより、学校においても探究型学習の基本的な理解が進んだ。またワークショップでは、現在、課題に思っていることや困っていることを話し合ったため、所属校での探究型学習を推進する上で、ヒントになることがあった。

探究型学習の授業を受講者が実際に行うことは、研修のねらいである実践的指導力の向上と探究型学習に推進に効果がある。探究型学習の授業を公開し、参観者と意見を交換することで、授業者、参観者が探究型学習について理解を深め、探究型学習の授業づくりが改善されていくのは言うまでもない。また、探究型学習の授業を行うのにまだ不安な教員も多いことから、指導案づくりを一緒に行い、疑問や不安を解消し、授業づくりを行うことで実践する教員が増えていくものと考えられる。

最後に、受講者の感想には総合的な学習の時間の事例だけでなく、教科における探究型学習についての要望もあった。他の先進事例を知ることや探究型学習の課題を話し合う機会を今後も設定することで、探究型学習を理解する教員がさらに増え、探究型学習が推進すると考えられる。